在安七神戸244号　2004年6月

神戸港と強制連行・捕虜を考える三冊の本出版

村田壮一

太平洋戦争を実体験として記憶にとどめる人々は年々少なくなっていく。まして、神戸に強制連行され、働かされた人々を外国に捜し訪ね、聞き取りをすることはどれだけの労力がいることだろうか。とにかく急がなければならない、というのが私たちの認識だった。

私たち「神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会」は、一九九九年十月に結成した。その後、新たなメンバーを得て、連合国軍捕虜の調査も行い、三冊の本を出版することができた。

一冊目「神戸港強制連行の記録―朝鮮人・中国人そして連合軍捕虜」は調査をまとめた「論文集」で、被連行者と日本側の証言を集め、過去の文献・資料を整理・検証することで、強制連行の実態を可能な限り明らかにしようというものである。

証言の一部を紹介すると、韓国全羅北道の李南淳さんは「面事務所（役場）の人が徴用通知令状を持ってきて今すぐ来いと言う。何も準備せずについて行った。役所に逆らうことなどできなかった」と話し、中国河北省の張鳳臣さんは神戸での生活を「いつも空腹だった。病気で働けない人は食べ物を半分にされた。（積荷の作業をしていた）船の船員の食べ残しを集めて食べたりした」と回想する。オーストラリアのジョン・レインさんは「弱り果てて行進の列から遅れた二名の捕虜がいた。日本の警備兵たちがフェンスのやぶれた金属線などを集め、それで彼らが気絶するまでぶちはじめた」という。

公的な資料によれば、朝鮮人五三五人が神戸に連行され二〇人が死亡（厚生省名簿）、中国人は九九六人が連行され一七人が死亡した（外務省報告書など）と記録されている。しかし、当時の新聞記事には、厚生省名簿にない事業場でも朝鮮人が使役されていたことが載っているし、死者を「脱走者」に分類している可能性もぬぐえない。中国人の死者についても、ほとんどを「公傷」でなく「私傷」とし「気候風土の変化」に死因を求めるなど、事実を隠そうとする意図がうかがえる。連合国軍捕虜にいたっては、終戦時、神戸に五四五人がいたという程度しか分かっていない。ようするに、戦後六〇年を迎えようとしているのに、この国では強制連行・強制労働の全体像すら把握できていないのである。本書では、これらの指摘とあわせて、資料の数値的な分析や証言とのつき合わせなどを試みている。

二冊目の「アジア・太平洋戦争と神戸港―朝鮮人・中国人・連合国軍捕虜」は、中学・高校生にも読んでもらえるよう教科書の副読本的にまとめた。平清盛や勝海舟などを取り上げながら神戸港の歴史を振り返り、戦時下に集積した軍需産業にも触れつつ強制連行について分かりやすく書いている。

三冊目の「夏は再びやって来る―戦時下の神戸・オーストラリア兵捕虜の手記」は、西オーストラリア州在住のジョン・レイン氏による手記を本会会員の平田典子さんが翻訳したものである。

レイン氏は一九四二年二月のシンガポール陥落で捕虜になり、四三年六月から終戦まで、神戸市内の捕虜収容所を転々としながら港で荷役作業をさせられた。翻訳版で二五〇ページに及ぶ手記は、当時の監視の目を逃れながら書き続けた日記を基にした詳細なもので、日本に連行された捕虜の記録として大変貴重なものになっている。

手記には、一人一日一二トンもの積荷を運ばされたという重労働で「夜毎うずくような頭痛に悩まされ、休みの日には体の痛みで動くことすらできなかった」とし、積荷の食物を盗んで食べながら飢えをしのいだが「ビタミン不足に悩まされ脚気を起こすもの、視力を失うものがいた」と記録している。一方で、コーラス隊を結成したり、ありあわせの材料でクリスマスケーキもどきを作るなど、希望と楽しみを見出そうとしていた様子も書かれている。終戦による解放後にカメラを入手し、空襲で瓦礫となった収容所の様子など貴重な写真を残し、本書にも掲載している。

広島・長崎、そして各地の空襲など、太平洋戦争の被害の面が強調されてきた日本で、強制連行や従軍慰安婦などの問題がクローズアップされたのはここ十数年のことである。私たちの活動も遅きに失したとはいえ、被連行者の生の声を聞くと、ふだん見慣れた神戸港に別の光景が浮かんでくる。同じ過ちを二度と繰り返してはいけないという思いを、これらの本をとおして一人でも多くの人々に伝えたい。

「神戸港強制連行の記録」は明石書店刊三四八ページ四五〇〇円（本会からの購入で三八〇〇円）、「アジア・太平洋戦争と神戸港」はみずのわ出版刊三二ページ八〇〇円、「夏は再びやって来る」は神戸学生青年センター出版部刊二五八ページ一八〇〇円。元神戸警備隊員の松本充司さんから提供していただいた、戦時中の警備対象の重要施設や外国人抑留所などを記した地図の復刻版も五〇〇円で配布している。

また本会では、強制連行を永く記憶にとどめるための石碑を神戸港に建立する計画を立てている。皆さんのご協力をお願いしたい。本会事務局は神戸学生青年センター〇七八・八五一・二七六〇

（神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会）